

提出日 平成25年3月16日

平成24年度 総合文化研究所研究助成報告書

研究の種類 (該当に○)

海外共同・共同研究  個人研究  出版助成

研究代表者 (所属・職名・氏名) 家政学部・准教授・高橋大輔

研究課題名

小学校建築における余裕教室空間の利用実態に関する研究

研究分担者 (共同研究者)

研究期間

平成24年4月1日～平成25年3月31日

研究を実施することになった経緯 (海外共同の場合のみ記入)

研究組織 [ 氏名, 所属, 役割分担 ]

高橋大輔、家政学部 建築・デザイン学科、研究代表者

研究発表 (印刷中も含む) 雑誌及び図書

日本建築学会関東支部建築計画委員会シンポジウム6月発表予定

## 研究実績の概要

本研究は、小学校建築で著しく増加している余裕教室（余裕教室）空間の利用方法について、その実態を調査分析し、今後の小学校建築における建築計画の指針を得ることを目的としている。

まず、関東地方における余裕教室の現状を探るために、教育委員会が公表している資料を基にその実態を明らかにした。

さらに、日本国内において非常に興味深い利用をしている台東区たなかデイホーム、いけのはたデイホーム 熊本県矢部町立中島西部小学校、宮崎県延岡市立恒富小学校、福岡県福岡市立有住小学校、の計5施設について実態調査を行った。

台東区の2施設については、地域の高齢化と少子化に伴い、小学校の余裕教室をデイケアセンターとして活用し、かつての教室を高齢者が利用可能なように改修を行い、バリアフリー化していた。ただ、予算が少なく、管理者が満足できるレベルまでには到達できていないことが分かった。特に床仕上げについては、高齢者の足腰に負担がかからないようコルクタイルなどに変更したいというのが管理者側の希望であるが、実際には小学校の床をそのまま使用しており、改修の際にも様々な制限があることが明らかになった。

熊本県矢部町立中島西部小学校は、中山間地域に建つ小学校であるが、農村部の少子高齢化に伴う統廃合によって、高齢者福祉施設として再活用されているものである。この施設では、地域の高齢者のみならず、地域住民の雇用機会をつくることによって、誰もが気軽に立ち寄れる「地域の縁側」としての役割を担っていることが分かった。この施設の管理者は積極的に町に働きかけることによって、施設の内容を充実させていった経緯が明らかになった。

宮崎県延岡市立恒富小学校では、数年前まで大企業の工場で働く従業員の子どもたちが多く通っていた小学校であったが、不景気の影響を受け、次第に児童数が減り、現在は校舎のうちの一棟を地域の高齢者コミュニティセンターとして再利用している事例である。この施設の場合、利用者数が次第に増加するにつれ、利用プログラムを充実化させ、空き教室を再利用した部屋の数も足りないとの声が出るほど利用率が高かった。また、地方都市であること、高齢者が利用者の大半を占めることから、自家用車での来所者が多く、現在は小学校の職員たちと駐車場を兼用しているが、数が足りず、他の施設では見られなかった問題が明らかになった。

福岡県福岡市立有住小学校は、福岡市の郊外に位置する小学校である。周辺は典型的な郊外住宅地であり、以前までは児童数が多かったが、年数が経つにつれ減少するという、それらの地域独特の特徴を示していた。ここでも児童数の減少に伴い、空き教室が増え、市内の保育園が分園を開設することで再利用を行っている事例である。ここでも一棟が空き教室になり、この保育園が2教室分を保育園として利用し、他は小学校の学童保育施設として利用している。この保育園の設計計画の際、園側の意見がまったく反映されないまま工事が進められたため、非常に使い勝手が悪く、他の小学校の空き教室を分園として計画する時には、園側の意見を十分に反映させたとのことであった。

以上、少子高齢化に伴う小学校の余裕教室の再利用の実態について、関東圏の現状および再利用の興味深い事例の調査を行うことにより、それらがどのように利用されているか、また資料だけでは見えてこない問題点も明らかにすることが出来た。

さらに管理者側が、建物の所有者である自治体側に積極的に働きかけることによって、より充実した施設運営および建築空間をつくりあげていくことが可能であるということを明らかにすることが出来た。